

Contents

活断層・地震研究センターの設置

CCOP タイ・パタヤ会議に参加して

「GEO Grid・アジア地質情報社会基盤に関するCCOP - 産総研国際会議」参加報告

「産総研キャラバン2009FUKUI」に【移動地質標本館】を出展しました

2009年APEC IST-WG メキシコ会議の参加報告

平成21年度 地質調査総合センター 新入職員研修が行われました

スケジュール

編集後記

活断層・地震研究センターの設置

岡村 行信（活断層・地震研究センター長）

2001年に設立された活断層研究センターは2009年3月31日に設置期間を終了し、4月1日には新たに活断層・地震研究センター(期限5年)が設立されました。新センターは、従来の活断層研究センターと、地質情報研究部門の中にあった地震関連研究グループとが一体となり、一つの研究ユニットを構成しています。

新センターの設立に先だって、2006年4月に産総研内の地震関連グループ、チームからのメンバーによって構成される「産総研地震研究将来検討委員会」(佐竹健治委員長を含め、12名の委員で構成)を設置し、産総研の地震関連研究の進むべき方向を、約1年かけて検討しました。その中では、産総研の特徴を活かした地質学を軸とする研究を展開すること、数十万年間の時間スケールの地殻変動と短時間の地震活動や地殻変動を総合的に考察すること、将来の地震を予測するだけでなく、地形学・地球物理学・地球化学・地盤工学も融合させて地震像に迫るべきであるという方向性を示しました。そして、今後進めていくべき研究課題を、内陸地震(陸域・沿岸域)の予測、海溝型地震の予測、及び地震災害の予測に整理し、それぞれの内容を以下のようにまとめました。

- ・内陸地震の予測については、これまでの地質学的調査を主体とした履歴解明に加え、地殻活動のモニタリング、モデリングといった地球物理学的な研究を融合させることにより、陸域・沿岸域で発生する内陸地震について、物理的合理性のある長期予測(規模予測、時間予測)を目指す。

- ・海溝型地震の予測については、地質学的手法による地震履歴調査と地下水モニタリングによる短期予知を推進する。また、長期予測的時間スケール(過去1万年～数百年間)と中～短期予知的時間スケール(数十年間～数時間)の地殻変動を

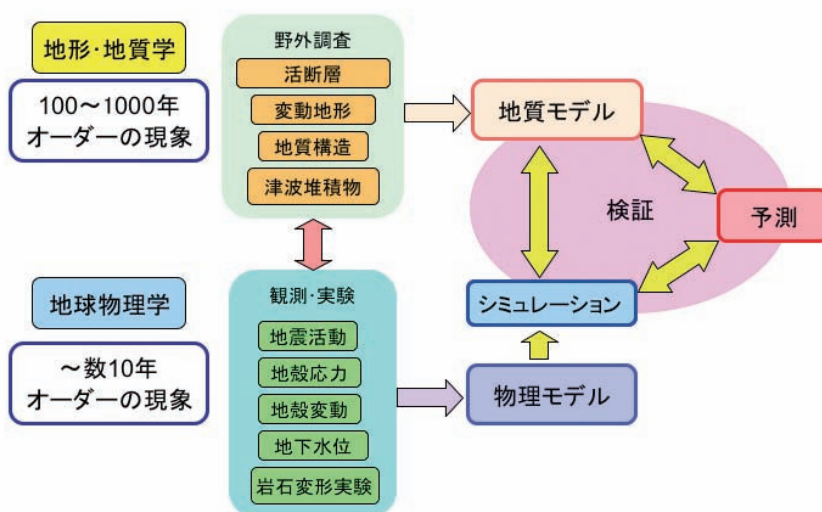


図1 活断層・地震研究センターが目指す分野融合的な研究の展開。



統一的に説明できるモデルの構築を目指す。

・地震災害の予測については、活断層・地下構造の地質情報や地殻変動・地震動等の地球物理学的観測データを活用し、内陸地震及び海溝型地震に伴う将来の地震動、津波及び地表変形の高精度な予測を目指す。

この「産総研地震研究将来検討委員会」の報告が、活断層研究センター終了後の新たな研究ユニット設計の基になりました。一方で、この報告書が作成された後に、2007年能登半島地震、同年の新潟県中越沖地震、2008年の岩手・宮城内陸地震などが発生しました。それらの地震は、今まで活断層と評価されていなかった場所で発生したことから、従来の活断層調査や評価は不十分であり、防災には十分に役立っていないという指摘が出されました。地震後の詳細な調査によって、いずれの地震も既存の活断層の活動によって発生したことが明らかになったことから、日本列島にはまだ多くの未調査活断層が存在することが改めて認識されました。特に2007年の2つの地震は海底の活断層が原因であったことから、海底活断層の調査が促進されることになりました。

今後発生が予測されている地震として、駿河トラフおよび南海トラフ沿いで発生するマグニチュード8を超える東海・東南海・南海地震があります。これらの地震は過去の歴史記録に基づいて100～200年間隔で発生すること、最近では1944年及び1946年に発生していることから、今後30年間の発生確率は50%以上であると予測されています。また、東海・東南海・南海地震の前後には内陸地震が多発することも歴史記録から知られています。最近の内陸地震の発生状況は、過去の東海・東南海・南海地震発生前の状況とよく似ています。このようなことから、今世紀の前半の日本列島は、複数の大きな地震に襲われる可能性が高いと考えられています。

上記のような状況を踏まえ、活断層・地震研究センターは、活断層や地殻変動などの調査や観測を着実に進めるとともに、地形・地質から地球物理・地震工学までの多様な専門分野の研究者が集結する特長を活かし、地震を総合的

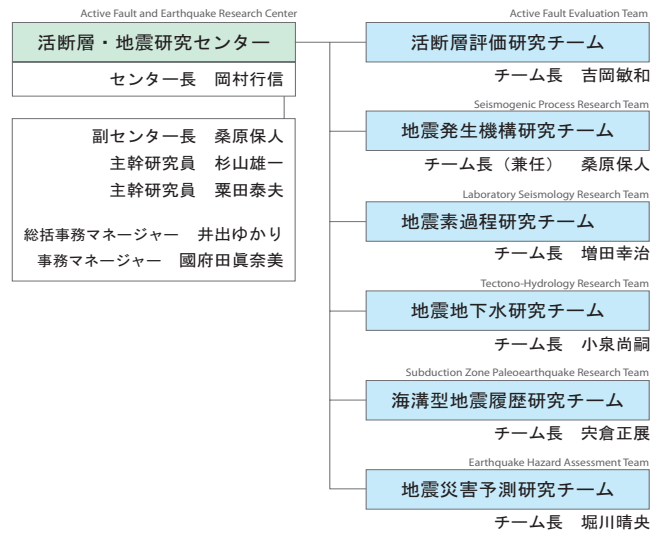


図2 平成21年度活断層・地震研究センター新体制。

にとらえ、地震防災に貢献する研究を実施する予定です。図1はそのイメージを示したもので、地形・地質の調査データに基づいた過去の長期間の活断層活動を説明する地質モデルと、最近の地震活動、地下水水位変化および地殻変動などの地球物理学的観測データに基づいた活断層活動・地震研究とを説明できるモデルを構築し、地震の予測を試みます。

活断層・地震研究センターは、常勤研究者が26名、ポスドク・テクニカルスタッフが22名、事務部門5名の体制でスタートしました。研究チームは6つに分かれ、内陸活断層に関しては、活断層の地形・地質学的調査、地震物理観測、変形実験を行う3チーム、海溝型地震については、沿岸域の地形・地質学的調査、地下水等の観測を行う2チーム、地震災害の研究を行う1チームからなります(図2)。各チームの研究内容やメンバー構成は、ホームページで紹介しています。

<http://unit.aist.go.jp/actfault-eq/index.html>

さらに、これらのチームの壁を越えた研究展開も目指して行く予定です。

CCOPタイ・パタヤ会議に参加して 森田 澄人 (地質調査情報センター)

2009年2月23日から3月1日まで、タイのパタヤでCCOP会議が開催されました。今回の会議はまず3日間の戦略計画ワークショップに始まり、間に1日の第2回財務委員会をはさみ、最後に3日間の第53回管理理事会が開催されました。日本の代表団は産総研の加藤GSJ代表と、

地質調査情報センターから脇田センター長、鈴木および森田、またアドバイザリメンバーと財務委員として嶋崎参与(CCOP名誉顧問)が参加しました。

私は今回が初めてのCCOP会議への参加で、特に印象的だったのは前半の戦略計画ワークショップでした。当ワー

クシヨップは CCOP のマネージメントを見直す機会として初めて開催されたもので、特別に招聘された BGS (英国地質調査所) の David Ovadia 氏によって進められました。Ovadia 氏の進行は現在の CCOP の現状の分析と課題の整理に徹しており、非常に合理的で全員参加型の会議進行にはたいへん感銘を受けました。

作業は CCOP の良い点、悪い点、うまく機能している部分と、そうでない部分の洗い出しから始まりました。その一つの手法として、大きめの付箋を配布し参加者全員の意見を求めました。「すべての意見が valid (有効) である」と声をかけ、ホワイトボードに集めるとそれをグルーピングして全体の意見をまとめ挙げました。

また、CCOP が目指すべきであろう課題を 7 項目挙げ、これらが書かれたプリントをそれぞれ壁に貼ると、全員に丸いカラーシールを 11 個ずつ配りました。カラーシールは CCOP のマネーであり、一人一人が全てのシールを使いながら重要と考える課題に対してシール (予算) を張り付ける (投資する) 試みを行いました。シールを張りながら気づきましたが、11 という数は素数であり安易な分配ができないようになっていきます。7 課題に対する各個人の意見が反映されるには絶妙な数であったと思います。

また、全員またはグループに分けてホワイトボードの前に集まり、各課題の分析を試みました。その目的は何のために? 誰のために? その価値は? 優先順位は? 時間スケールは? 遂行の障壁は? その競合相手は? また協力できる相手は? 出資者への見返りは? と、このような議論を共同作業で確認し合いました。

これらのプロセスは至って単純な作業のようですが、全員の意見を集め、その整理も容易かつ簡潔で、また定量的評価による優先順位の決定などに利用できるため、組織やプロジェクトのマネージメントにはたいへん有効だと感じました。帰国後、脇田センター長はその手法の一部を同セ



写真 戦略計画ワークショップでのワンショット。全員から集めた付箋をまとめて議論します。右から 2 人目が Ovadia 氏。

ンターの全体会議で実行されたようです。

財務委員会については嶋崎参与が日本からの唯一の委員として参加しました。財務状況は昨年開かれた第 1 回財務委員会以降に分析が進められ、今回の委員会で順調との見通しが明らかになりました。

また、管理理事会は同じホテル内で会場を変え、おごそかに行われました。今回は東チモールがメンバー国として迎えられました。今回の会議に先行して行われた資源担当のセクター・コーディネータ選挙は明確な決め手がなく決着がつきませんでした。そのため会期中に再投票の実施が決定し、後にベトナムの Nguyen Nhu Trung 氏が当選となりました。閉会前には、2 年間バンコクで CCOP 事務局を務められた村尾氏の挨拶がありました。今後のスケジュールは、2009 年総会が 10 月にベトナムで開催される予定です。また 2010 年は 3 月に管理理事会を韓国で、総会は秋頃インドネシアで開催される見込みです。

「GEO Grid・アジア地質情報社会基盤に関する CCOP-産総研国際会議」参加報告

宝田 晋治 (地質情報研究部門)

2009 年 3 月 17 日、18 日の 2 日間に渡って、タイ・バンコクにおいて、「GEO Grid・アジア地質情報社会基盤に関する CCOP-産総研国際会議」が開催されました。GEO Grid は産総研の融合研究課題として地質分野、情報通信・エレクトロニクス分野、環境エネルギー分野が協力して進めているプロジェクトです。CCOP は、アジアの

11 カ国が加盟している地球科学関連の国際委員会であり、現在、産総研では沿岸海洋、火山、地質情報などのプロジェクトが進行中です。2008 年 1 月には、つくばで第 1 回 CCOP-産総研 GEO Grid 国際会議が開催されています。今回の会議は昨年を引き続き、GEO Grid プロジェクトをアジア各国の地質調査機関に普及するとともに、各国の地質

情報戦略について、今後の方向性を議論することを目的として開催されました。

産総研からは、地質調査情報センターの脇田浩二、阪口圭一、Joel Bandibas、情報技術研究部門の松岡昌志、児玉信介、地質情報研究部門の浦井 稔、宝田晋治の7名が参加しました。タイ鉱物資源局（DMR）副所長の Sukontapongpow 氏、国連アジア太平洋経済社会委員会（ESCAP）の Wu 氏、オーストラリア GeoScience Victoria の Simons 氏を始め、インドネシア、韓国、マレーシア、パプアニューギニア、フィリピン、ベトナム、タイ各国代表が参加しました。CCOP 事務局からは、Chun 事務局長、村尾産総研研究協力コーディネーターら5名が参加しました。Simons 氏は、国際地質科学連合（IUGS）の地質情報標準委員会（CGI）において、地質情報構造規格（GeoSciML）の構築を進めている方で、国際惑星地球年（IYPE）の主要活動の一つである OneGeology へも多大な貢献をされています。アジア地域の地質情報のデータ整備にあたり、GeoSciML が今後の世界標準規格として重要であることから、特別に講演をお願いしました。

17日は、冒頭で Sukontapongpow 氏による開会の挨拶がありました。その後、松岡氏による GEO Grid プロジェクトの現状紹介が行われました。GEO Grid の VO（virtual organization）システム、ASTER や PALSAR の衛星データアーカイブ、災害への応用事例などが示されました。続いて、阪口氏から地質調査総合センターにおける地質情報統合化の取り組みと GEO Grid で構築中の GSJ VO の概要が紹介されました。その後、児玉氏が、GSJ VO システムの詳細を紹介しました。GSJ VO は、地質調査総合センターが保有する各種地質情報を国際標準規格の WMS、WFS、WCS 等を用いて、セキュリティの高い状態で公開するもので、衛星情報や現地調査データとともに管理できるシステムを目指しています。浦井氏は、東アジア地域のシームレスな ASTER 標高データ、全球の ASTER GDEM プロジェクトの紹介を行いました。宝田は、ASTER 標高データを用いた火山重力流シミュレーションシステムの紹介を行いました。このシステムは、シミュレーション結果を GIS や Google Earth 用のデータとして出力する機能を備えており、各種の地質・災害情報との連携が可能となっています。松岡氏は、東北大准教授の越村俊一氏と進めている SAR 画像情報を用いたアジアオセアニア地域のリアルタイム津波災害検知システムの紹介を行いました。

17日の午後には、韓国、フィリピン、インドネシア、マレーシア、ベトナム、パプアニューギニア、タイの代表者から各国の地質情報化の取り組みについて紹介があ

りました。特にタイの DMR では、数年前から GEO Grid プロジェクトに参加しており、ASTER データを用いたデータ解析の結果や今後の要望を紹介しました。最後に、国連 ESCAP 情報伝達技術・災害軽減部局の Wu 氏が、国連の災害軽減に関する取り組みの現状について紹介を行いました。

18日には、アジア地質情報社会基盤をテーマに討議が行われました。Simons 氏が、まずオーストラリアにおける地質情報化の取り組みの事例として、SEE Grid、AuScope Grid の紹介をし、その後、地質情報構造規格（GeoSciML）の詳細を説明しました。この GeoSciML は、数値地質情報の整備を行う上で、地質分野の標準となる国際規格であり、昨年度第2版が公開されています。OneGeology においても、WFS によるデータ配信は、この GeoSciML に基づいて行われる予定です。続いて、Bandibas 氏は、CCOP 加盟国による OneGeology プロジェクトへの取り組みについて講演を行いました。現在、世界102カ国が OneGeology プロジェクトに参加しており、CCOP 加盟国からは、フィリピン、タイ、インドネシア、ベトナム、マレーシア、韓国、日本が100万分の1地質図のWMS配信を行っています。続いて CCOP 事務局の Uzarraga 氏が CCOP で進めているメタデータプロジェクトの紹介を行いました。現在は中国の主導で第2フェーズが進行中です。その後、韓国 KIGAM の Han 氏から、新たな CCOP のプロジェクトとして最近提案された、GIS を用いたアプリケーションによる自然災害予測図作成システムの紹介がありました。最後に、脇田氏が今後の CCOP 加盟国の GEO Grid と OneGeology、メタデータ等のプロジェクトへの取り組みについて提案を行い、1時間程度加盟国の間で今後の方針について討議を行いました。今後も、CCOP 加盟国は、GEO Grid、OneGeology プロジェクトに積極的に参加していくことが



写真 「GEO Grid・アジア地質情報社会基盤に関する CCOP-産総研国際会議」の参加者（CCOP 事務局撮影）。

確認されました。

18日の午後は、昨年 DMR 内に完成した 5 階建ての新しい CCOP 事務局を訪問しました。その後、DMR の所長と懇談を行いました。さらに、DMR 鉱物資源情報部長の Wongsomsak 氏から、タイにおける GEO Grid の利用状況の紹介が行われました。

現在 CCOP 加盟国の地質調査機関では、GEO Grid の ASTER 衛星データを用いた研究提案が増えてきています。ご興味のある方はぜひご参加下さい。

GEO Grid プロジェクト：
<http://www.geogrid.org/jp/first.html>

OneGeology プロジェクト：<http://www.onegeology.org/>

「産総研キャラバン2009FUKUI」に【移動地質標本館】を出展しました

吉田 朋弘（地質標本館）

2009年3月7日（土）～8日（日）に、福井県児童科学館「エンゼルランドふくい」（福井県坂井市春江町東太郎丸3-1）で開催された産総研キャラバンに移動地質標本館を出展しました。

GSJ ニュースレター No.54 2009/3月号では、同「はままつ」の報告を紹介しましたが、今回で産総研キャラバンも4回目となりました。3月のこの時期、福井には雪があるものと勝手に思い込み、東海道新幹線米原駅から L 特急しらさぎで春江駅に向かいました。「トンネルを抜けるとそこは・・・雪一つ無いのどかな田園風景」でした。

キャラバンのメインは、恐竜ロボット（体長3.5mのティラノサウルス）です。スペースの関係もありましたが、5回の実演は毎回満席で会場からあふれていました。よく見ることができなかった来場者も多々おられました。前回（浜松）、過去最高の賑わいと報告しましたが、それに匹敵するほどです（写真1）。

移動地質標本館は、『日本周辺の地形を立体視しよう！（プリズムメガネで見る「日本」・赤青メガネで見る「福井および周辺の地形」）』のコーナー、体験コーナーとして『地震でおこる液状化現象を「エキジョッカー」で（巨大エキジョッカーほか）』と『ペーパークラフト「飛び出す火山を作ろう！」・「デスモスチルス」』を出展しました。

初日が終わり、アフター5の打ち合わせ！？で盛り上がり実現したのが、恐竜ロボットとエキジョッカーのコラボレーションです。1時間おきに開催される恐竜ロボットデモの前座として、巨大エキジョッカーを使った液状化実験を行うもので、叩くだけで砂が勢いよく吹く様子に歓声が起こりました。今後の発展が見ものです。

また、今回新たにデビューしたのが「デスモスチルス」のペーパークラフトです。「飛び出す火山」に続き、体験コーナーに活用すべく、地質標本館企画・運営チームが検討し、東京大学 犬塚則久先生・地質標本館 兼子尚

知氏が監修のうえ、試作品が出来上がりました。担当者が作成してみると1-2時間を要し、体験コーナーには困難かとも思われましたが、試験的に今回のイベントにもって来ました（写真2）。作成に時間を要するため回転が悪く、その場で作成せずお土産としても渡しましたが、中には熱心な子供（小学生ぐらいの女の子）がいて1時間ほどで完成させていきました。あの集中力はたいしたもの



写真1



写真2

す。試作品として入ったものは、ハサミでパーツを切り出すため時間を要しますが、後日、納品されるものには、最初から切り込みが入っておりハサミを必要としません。これだけでも、大きな時間短縮が見込めます。今後のイベントデビューが楽しみです。

さて、2008年度の産総研キャラバンはこれで終了です。2009年度の計画は未定ですが、どこの博物館に行けるか楽しみです。

2009年APEC IST-WGメキシコ会議の参加報告

森田 澄人（地質調査情報センター）

はじめに

2009年3月23日から25日の期間、APEC (Asia-Pacific Economic Cooperation) の第36回産業科学技術ワーキンググループ (IST-WG: Industrial Science and Technology Working Group) 会議がメキシコ、ユカタン半島のメリダ市で開催されました。日本からの代表団として、経済産業省と文部科学省から各1名、プロジェクト関連の発表者にJAXAから1名と、産総研地質調査情報センターの森田の計4名が出席しました。会合はプロジェクト報告を中心とした1日目のサイド・ミーティングに始まり、2日目に総会が開かれ、最終日はマヤ遺跡の見学ツアーが行われました。

GSJのAPEC研修報告

地質調査総合センター (GSJ) では、2008年11月に同ワーキンググループのプロジェクトとして研修コース「Human capacity building for natural hazard mitigation in cities and coastal regions: 都市と沿岸域における防災」を開催し、6カ国から9名（男性6名、女性3名）の研修生を招待して火山や地震、地滑りや海岸浸食などの現象や防災に関わる講義やフィールドセミナーを実施しました（詳細は本誌2008年12月号に掲載）。今回の会議における私の発表はこのプロジェクトの実施報告にあたります。同プロジェクトは2007年の同ワーキンググループ会議で承認され、5万ドル余りの補助を受けて開催されました。3週間にわたる研修コースで他のプロジェクトよりも大掛かりであることなど、各国や事務局の注目は大きいものでした。

サイド・ミーティングの進行は各サブグループ A) 人材育成、B) 国際科学技術ネットワーク、C) 研究の連結と改革、および D)

技術協力と戦略計画、の順で構成され、GSJのプロジェクトはサブグループAに属します。発表にはおよそ10分毎の時間が充てられていましたが、当センターのプロジェクトはとても短時間で伝えたいことすべてを説明しきれものではなく、質問が相継いだことで終了した頃には25分程が経過していました。

質問においては、他のプロジェクトとのリンクは？参加者のバランスは？などが問われました。研修コースと直接関わったプロジェクトはありませんが、多岐の分野とプロジェクトにまたがったGSJや他の諸機関の研究者たちが協力を惜しまず講師として立ったこと、またジェンダーバランスに努めたことや、海外から講師を招聘したことなどを伝えました。プロジェクトの遂行に問題はなかったかの質問については、実施中の問題よりも今後の計画に関する注文を加えました。GSJは2年連続してAPEC研修を開催しました。しかしながら、フィールドセミナーを盛り込むなどより良い研修コースの開催に努めようとする当セン



写真1 IST-WG 会議風景。テレビカメラが3台用意され、代表席に囲まれた中央には4台の大型モニタが設置されている。広い会場でも常に発表者の表情が映し出され、良い臨場感がつくり出されている。

ターの自己負担が大きくなるため 2009 年の開催は見送ることにしました。APEC から支給される研修生や講師の国際旅費や日当については謝意を表しながらも、これだけでは不十分であることを伝え、今後検討がなされることを求めました。

本プロジェクトの内容と結果は APEC のオフィシャル発行番号を付した CD として配布し、発表時や個々の対話でも同プロジェクトは高い評価をいただきました。これは、プロジェクトに携わって下さった多くの方々のご尽力によるものと改めて感じました。

総会、パーティー、そして見学ツアー

2 日目の総会では、今後のプロジェクトマネジメントについて議論されました。これにより 2009 年以降の会議開催とプロジェクトの承認プロセスが変更されることになりました。昨年まで年に 1 度だった新規プロジェクトの提案・採択プロセスが 2009 年は 3 回、2010 年以降は 4 回実施されることとなります。また、新規プロジェクトは審査を受ける 6 週間前までに提案書を提出しなければなりません。これにより各提案は厳正に審査され、機会が増えるために提案件数が増えてより良いプロジェクトを多く採用できること、また一旦不採択となった案件もモチベーションを削がれることなく、すぐに次の機会が与えられるなどの効果があるようです。

毎晩開かれるディナーパーティーは、バスに 1 時間ほど乗って地域の古い荘園のレストランへ出かけました。世界中の要人が移動するとあって、バスの前には常にパトカーが露払いとして先導していました。食事は地元ユカタンの料理が多く、テキーラもふるまわれました。同時に演奏やユカタンの舞踊が披露されるなどたいへん賑やかなパーティーでした。日中の会議は世界スタンダードで朝 9 時に始まりますが、ディナーはメキシコの習慣で 21 時頃に始まりホテルに帰る頃には 24 時を過ぎてしまいます。そのため両方に合わせていると睡眠不足に陥った人も多かったようです。

最終日の見学ツアーは、メリダからバスで 2 時間ほど東のチチェン・イツァ遺跡を訪ねました。やはりバスの前ではパトカーが先導し、あとで気づきましたが後方には万が一に備え救急車が伴走していました。チチェン・イツァ遺跡には 9 世紀から 13 世紀頃のマヤのピラミッドや天文台などが残されています。予想していたよりも広大な範囲に様々な建造物がありました。一日に 3000 人ほどが訪れるとのことですが、広く青い空の下、敷地も建造物も大きいため混み合った雰囲気はまったくありませんでした。この

一帯の地質は石灰岩で、ピラミッドなどの建造物は石灰岩を加工して造られ、時代毎にデザインや技法の変化する様子はとても趣深いものでした。

今回の会議参加にあたり、日本の代表団や APEC 事務局、また会議をサポートしてくれたメキシコの方々等にはたいへんお世話になりました。ここに謝意を表します。



写真2 最終日、チチェン・イツァのマヤ遺跡を見学。ピラミッドの前で記念撮影。

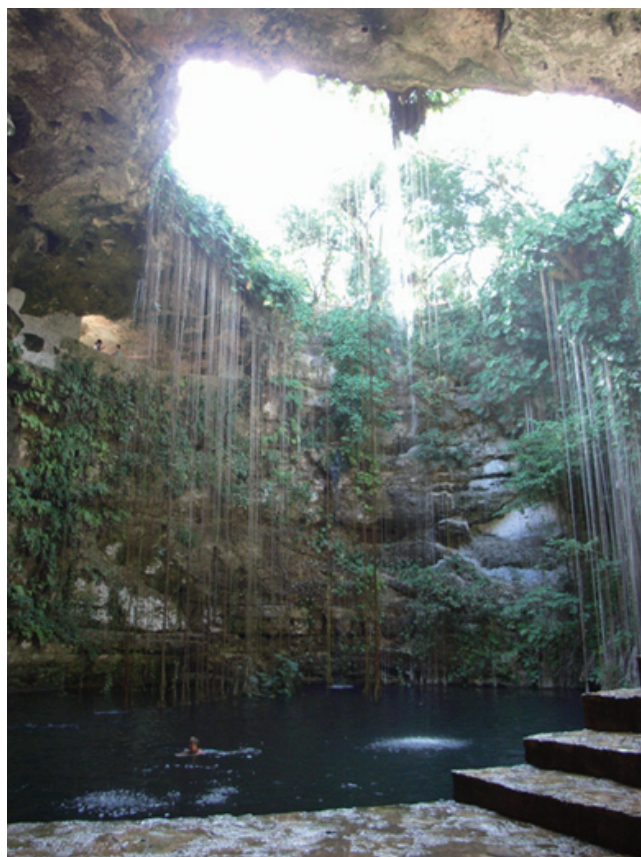


写真3 チチェン・イツァ遺跡近くの陥没した石灰岩層も観光地になっており、底にできた池では多くの観光客がスイミングを楽しんでいました。植生の根が地上から無数に垂れており、「根につかまるな!」との注意書きがありました。これを引っ張ると恐らく大変なことに・・・

平成 21 年度 地質調査総合センター新入職員研修が行われました

吉川 敏之 (地質調査情報センター)

地質調査総合センター新入職員研修は、地質調査総合センター内の交流を促進する意味もあり、平成 20 年度より常勤職員にとどまらず研究現場に採用となった職員を広く参加可能としています。更に今年度は、既に在職している職員でも希望があれば参加可能としました。産総研全体で行う研修があるので、その前後に分かれたスケジュール(4月2～3日、13～15日)となりましたが、約 20 人の皆さんの参加がありました。また、5 月にも希望者を対象にアウトリーチ研修、野外巡検を予定しています。



新たに地質調査総合センターに仲間入りした皆さんを、どうぞよろしくお願いいたします。

写真 平成 21 年度地質調査総合センター新入職員研修に参加された皆さん。左から、井川 怜欧、松本 弾、河野樹一郎、山本隆広、納谷友規、石村豊穂、野々垣 進、荻津 達、佐藤智之、安富友樹人、佐藤鋭一、吉河秀郎、前列左より、小峯彩子、星野美保子、恒松麻衣子、楳原京子、田林 雄、岡田真介、天野敦子 (敬称略)。

編集後記

富田 悟幸

(地質調査情報センター)

4月だというのに夏日を記録し、そしたら真夏日も記録する異常気象。30年後の夏は北極海の氷が無くなるかもと予想するニュースも出てきました。早速半そでのYシャツを購入にお店に行ってみました。まだ販売されていませんでした。今年の夏の暑さはどうなるのかな。

4月は組織再編やら人事異動でお忙しい中、皆様には原稿を執筆戴きましてありがとうございました。お陰さまで今月号もできました。活断層研究センターは地震グループと合併し次なるステップへ躍進していくのでしょう。

このニュースレターがお手元に届く頃にはゴールデンウィークになっていますが、今年のゴールデンウィークは皆様はどのようなスケジュールを考えていますか。2日休むと長く休めるとというのが3回ありますので周りの方と調整して休暇を取得してください。

スケジュール

4月14日～7月6日

地質標本館春の特別展「五百澤智也 山のスケッチとフィールドノート」(地質標本館)
http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2009/fieldnote/fieldnote.html

【関連イベント】

5月10日：特別講演会「氷河の痕跡を探せ！ ー北アルプスの氷河地形調査ー」
(地質標本館映像室)

5月10日

地質の日 <http://www.gsj.jp/geologyday/>

5月16～21日

日本地球惑星科学連合大会(幕張メッセ) <http://www.jpogu.org/meeting/index.htm>

6月3日

地質地盤情報協議会 平成21年度第1回総会及び意見交換会
(富士ソフト アキバプラザ 6階)

6月15日

第14回GSJシンポジウム「地質リスクとリスクマネジメント」
(東京大学 小柴ホール) <http://www.gsj.jp/Event/090615sympo/index.html>

7月2日

第15回GSJシンポジウム「活断層と地震(仮)」(秋葉原ダイビル・コンベンションホール)

GSJ Newsletter No.55 2009/4

発行日：2009年4月27日

発行：独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター

編集：独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査情報センター

編集 浩二 (編集長)

富田 悟幸 (編集担当)

志摩 あかね (デザイン・レイアウト)

GSJ ニュースレターは、バックナンバーも含めて、地質調査総合センターホームページでご覧になれます。

■地質調査総合センターホームページ：<http://www.gsj.jp/>

■GSJ Newsletter のページ：<http://www.gsj.jp/gsjnl/index.html>

〒305-8567 茨城県つくば市東 1-1-1 中央第 7
TEL:029-861-3687 / FAX:029-861-3672